

令和 7 年 2 月 9 日(日)
第 ● 回 西楽寺講座

西楽寺と周南 ー考古学と祇園祭からー

寺井 崇浩(豊橋市文化財センター)

はじめに

Q1 考古学とは何ですか？

→A 考古学とは「過去人類の物質的遺物により、人類の過去を研究する学」(濱田耕作 1922 『通論考古学』)です。当時の社会を研究するものであり、一個人に言及することはほとんどできません。

Q2 西楽寺を考古学的に研究できますか？

→A 直接的にはできません。西楽寺における過去の発掘調査では成果を殆ど得ていません。出土した遺物も、弥生時代の高环と推定される土器片と、山茶碗 1 点のみです。

Q3 考古学から西楽寺を直接研究できないならば、どのように考古学的に見ますか？

→A 周辺の遺跡から、西楽寺の歴史的環境に迫ります。また歴史的環境の復元に際し、現存する仏像などの資料や祇園祭も補完的に扱います。

第 1 章 周辺遺跡と各時代の歴史的環境

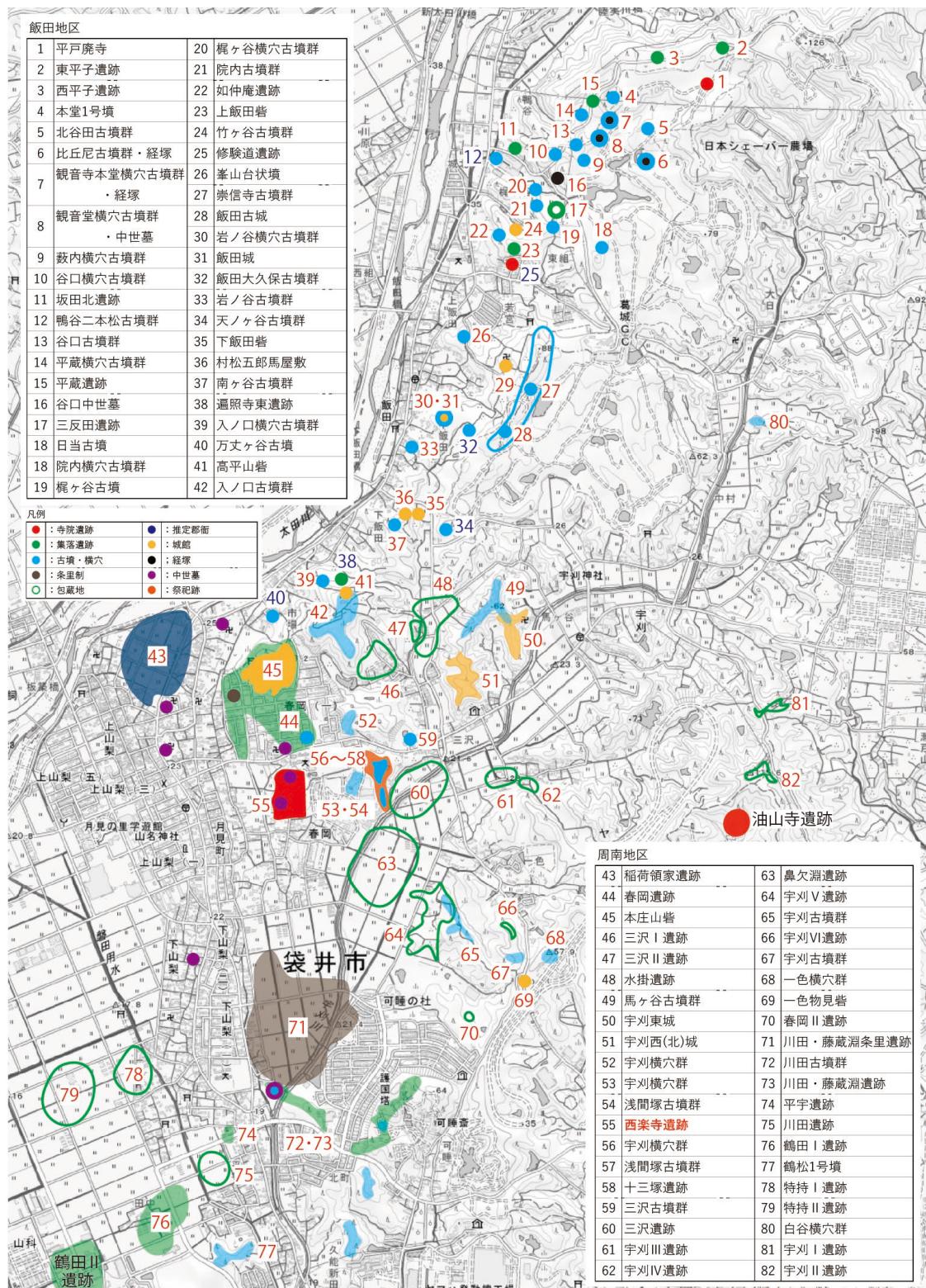
西楽寺が位置する山名小学校区は周智郡の南端(周南)であり、弥生時代以降の遺跡が確認されている。本章では、周南地区、さらに関係性が深い隣接する森町飯田の古墳時代以降の遺跡を概観したい(第 1 図)。また、西楽寺の資料と関連する考古学的事象にも触れたい。

第 1 節 古墳時代

仏教が伝來した 7 世紀以降、豪族は古墳に代わり寺院建立を行う。西楽寺は縁起による奈良時代の創建だが、豪族との関係も考慮し、古墳時代について先ずは触れたい。

周南の古墳時代の遺跡として、稻荷領家遺跡、春岡遺跡群、宇刈横穴群、川田・藤藏淵遺跡などがある。春岡遺跡群中の春岡古墳群は 4 基の古墳から構成され、1・3・4 号墳は古墳時代前期(3 世紀中頃～4 世紀)、2 号墳は後期(6 世紀)に位置付けられる。2 号墳は前方後円墳で在地系の擬似両袖式石室を有する。直刀や金箔を施した馬具・飾太刀環頭などが出士し、この古墳群は周辺を治めた豪族の墓と考えられる(写真 1・2)(袋教委 1998)。

また、飯田の西平子遺跡で竪穴住居、峯山台状墓では土器棺墓が見られ、当地域には古墳 59 基、横穴 61 基が確認されている(伊藤 1996)。中でも、崇信寺古墳群(5～6 世紀)、谷口横穴群(6 世紀末～8 世紀初頭)、薮内横穴古墳群(7 世紀)、本堂・比丘尼・北谷田古墳群(6 世紀末～7 世紀初頭)がある(森教委 1996)。崇信寺 10 号墳は 6 世紀末の円墳で、石室は畿内系の片袖式で、金銅製馬具の出土から周辺地域の豪族の墓と考えられている(第 2 図)。さらに、畿内系両袖式石室をもつ円墳である院内 3 号墳では 6 世紀第 4 四半期の双龍環頭太刀と馬具(第 3 図)、観音寺本堂横穴群では 7 世紀中葉の須恵器と 7 世紀第二四半期の双龍



第1図 古墳時代以降の西楽寺周辺遺跡

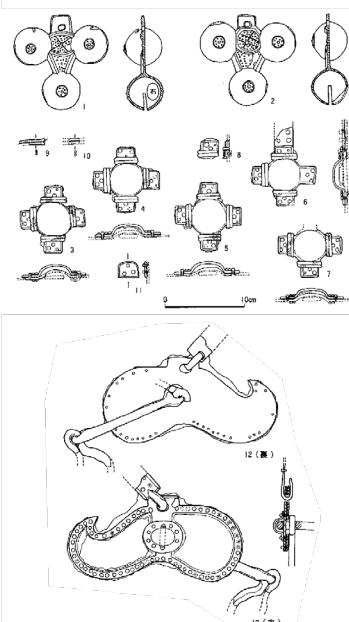
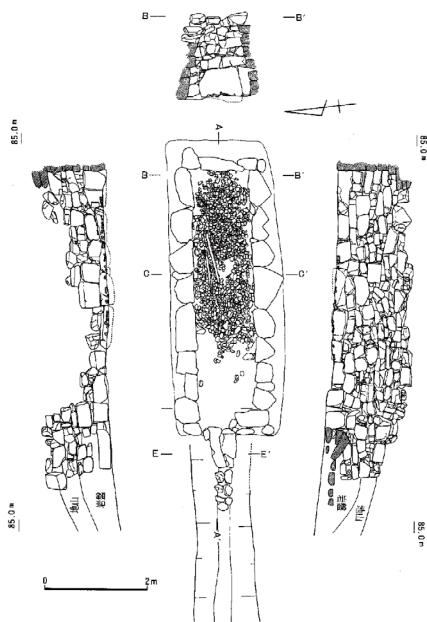
(森教委 1996・静埋文 2004・静古城 2022・どまんなか袋井 navi より作成)



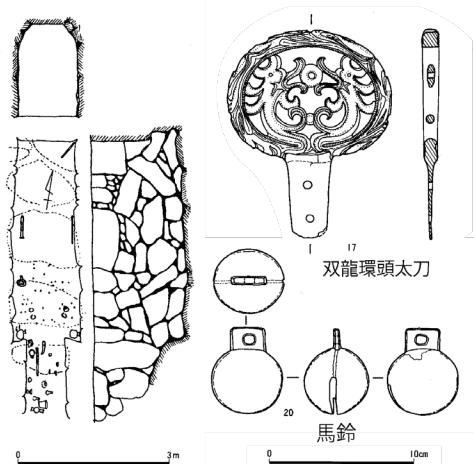
写真1 春岡2号墳横穴式石室



写真2 春岡2号墳出土遺物

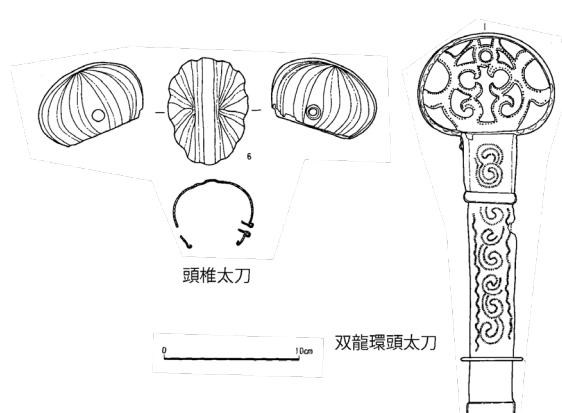


第2図 崇信寺10号墳の石室と出土馬具(森町1998より転載)



第3図 院内3号墳石室・出土品

(森町1998より転載)



第4図 観音寺本堂横穴群出土品

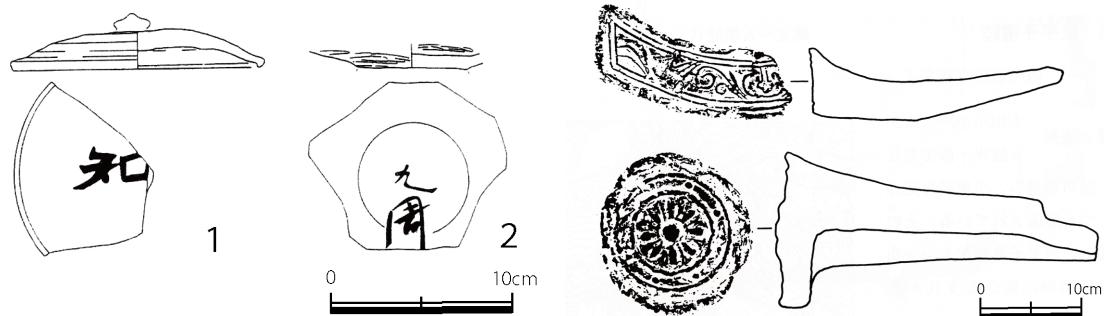
(森町1998より転載)

環頭太刀・頭椎太刀と馬具が出土している(第4図)。双龍環頭太刀の生産・流通には蘇我氏、頭椎太刀は物部氏が関与したとされる(豊島 2017・2019)。

第2節 奈良時代

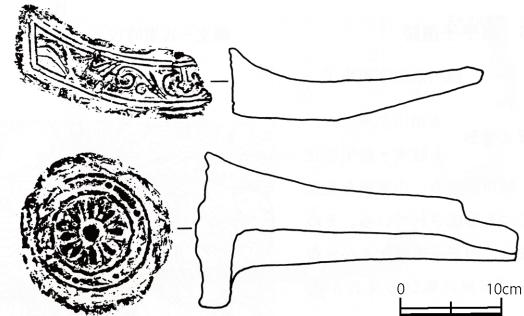
奈良時代の周南の遺跡として、稻荷領家遺跡、春岡遺跡群、川田・藤藏淵遺跡などがある。稻荷領家遺跡からは墨書土器が出土し、周智郡の略字と思われる「知」や周智郡の周と数字を組み合わせた「九周」も見られ(第5図)、これらから周智郡衙に比定されている。さらに、稻荷領家遺跡と春岡遺跡は近世太田川で分断されたが、本来は同一遺跡である(袋教委 1998・2007)。加えて、条里制遺構(水田)が春岡遺跡と川田・藤藏淵遺跡、春岡遺跡から掘立柱建物が確認されている(袋教委 1998・2007)。

また、飯田の平戸廃寺では平城宮式の軒瓦が出土しており、奈良時代前期(8世紀第2四半期)に位置付けられている(鈴木・平野 2023)(第6図)。これは、県内で最も平城宮式を純正に受け入れている例として評価されている。そのほか、坂田北遺跡では8世紀初頭～中葉の須恵器、さらに日当古墳(8世紀前葉)が見られる。



第5図 稲荷領家遺跡採取墨書土器

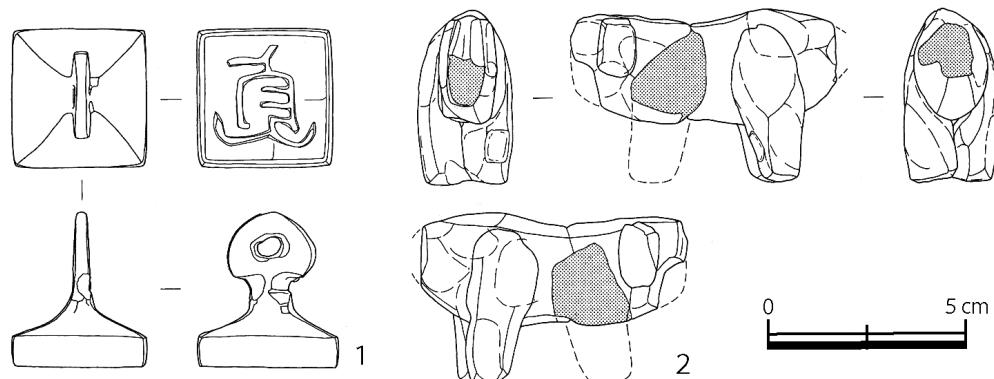
(松井 2003 より転載)



第6図 平戸廃寺出土軒瓦(森町 1998 より転載)

第3節 平安時代

平安時代の周南の遺跡として、川田・藤藏淵遺跡や稻荷領家遺跡、春岡遺跡などがある。川田・藤藏淵遺跡では平安時代の掘立柱建物が確認され、平安時代中期の「貞」の陽刻銅印(第7図1)が出土することから官衙遺跡、は土馬(第7図2)や祭祀に関わる記号と考えられ



第7図 川田・藤藏淵遺跡出土銅印・土馬(静教委 1996 より転載)

る墨書き土器から祭祀遺跡の可能性が指摘されている(静埋文 1996)。川田・藤藏淵遺跡は周南地区で最も詳細な発掘調査の報告が行われている遺跡であるが、9世紀(平安時代前期)の遺物は報告されていない(静埋文 1996)。9世紀の遺物が見られない状況は、奈良時代～近世にかけての遺跡である鶴田Ⅰ遺跡や、弥生時代～鎌倉時代にかけての遺跡である山科の鶴田Ⅱ遺跡と同様である(袋教委 2004・2010)。それに対して、稻荷領家遺跡と春岡遺跡では平安時代前葉の灰釉陶器・綠釉陶器が見られる(松井 2003)。これより、平安時代前期には周智郡衙とされる稻荷領家・春岡遺跡を除き、周辺は衰退したと考えられる。

また、飯田の池田遺跡からは平安時代後葉と思われる灰釉陶器碗が一点出土している(森町 1998)。比丘尼経塚では12世紀後葉～13世紀初頭の渥美窯産の壺・東遠産の山茶碗と経筒外容器が出土し(伊藤 1996)、觀音寺の境内に位置すると考えられている(足立 1998)。さらに、谷口中世墓では12世紀後葉～13世紀前葉の渥美窯産の壺が見られる(森町 1998)。

西楽寺の薬師三尊のうち、日光菩薩と月光菩薩は平安時代中期の作とされている(島口 2021)。さらに、西楽寺は平安後期の寛治元年(1087)に源顕房により再興され、当時は堀川天皇の御代で、その父白河院の院政が敷かれていた。また、現存最古の玉眼仏は仁平元年(1151)作の奈良長岳寺阿弥陀三尊像であり、この頃に同じく玉目仏である現在の西楽寺本尊が作られたと考えられる。さらに、薬師三尊の中尊も平安後期の作とされている(写真3)。

また、飯田には飯田荘が立券され、白河・鳥羽・後白河の三代の法皇の荘園となり、後に蓮華王院領となる。西楽寺が位置した宇刈郷も当時は国衙領であり、飯田荘に含まれたと考えられている(袋教委 1993)。



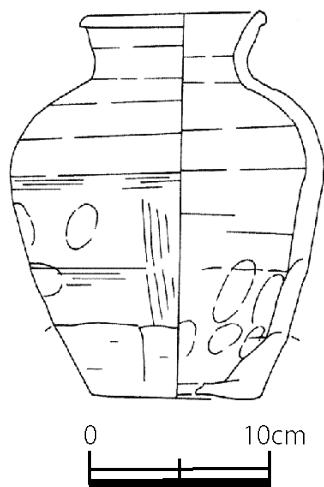
写真3 薬師三尊(左)・本尊阿弥陀三尊(右)(筆者撮影)

第4節 中世(鎌倉時代～戦国時代)

川田・藤藏淵遺跡では、川田1号墳(前方後円墳)の墳丘上に13世紀(鎌倉時代)の中世墓が確認され、平野部から13世紀代の山茶碗が出土している(静埋文 1996)。さらに、1951年8月に西楽寺本堂裏の墓地から13世紀中頃の渥美窯産小壺が出土したと伝わる(第8図)(鈴木 2017)。この頃の西楽寺は、本堂内陣の四天王像は鎌倉時代に造られたと伝わり、さらに正応3年(1290)に本尊阿弥陀如来に修理に伴う墨書が残る(大宮 2021)。また、飯田の比丘尼経塚では12世紀後葉から13世紀初頭の渥美窯産の壺・東遠産の山茶碗と経筒外容器が出土しており(伊藤 1996)、観音寺の境内に位置すると考えられている(足立 1998)。加えて、谷口中世墓では12世紀後葉～13世紀前葉の渥美窯産の壺が見られる(森町 1998)。

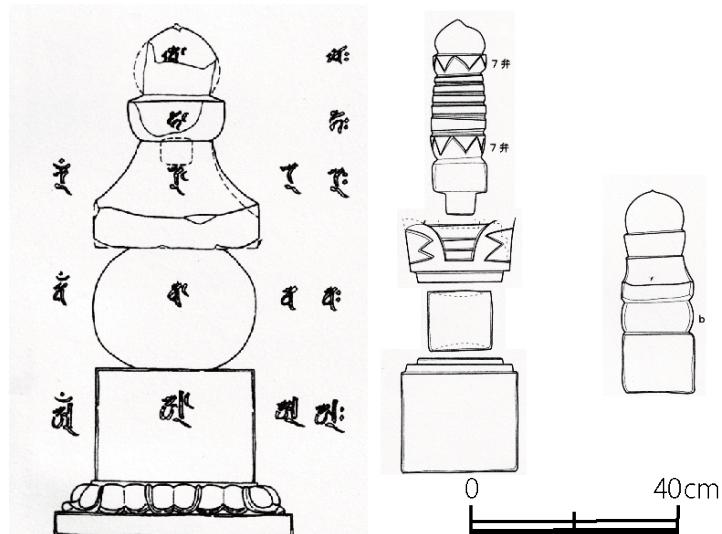
また、鎌倉末期には西楽寺が位置した宇刈郷は大仏維貞(おおらぎこれさだ)の所領であった。南北朝期には国衙領、室町時代には北野天満宮や勝間田氏、山内氏の所領で、戦国時代には西楽寺・多法寺・極楽寺の所領があった(湯之上 1983)。

室町時代になると、1400年頃に山内氏が飯田城を築城した。永禄年間(1588～1570)には村松氏が本庄山砦を築き、発掘調査の成果から武田と徳川の攻防の舞台となったと考えられる(袋教委 1998)。また、14世紀には飯田の観音堂中世墓、西楽寺境内に15世紀～16世紀の石塔が見られる(第9図)^(註1)。さらに、三沢古墳群では13世紀、春岡遺跡では13世紀と16世紀後半の中世墓が見られ、用福寺の橘逸勢供養塔で8点、正福寺墓地で4点、林光寺墓地で5点、観正寺墓地で8点、本立寺墓地で9点の中世石塔が見られる(静教委 2019)。



第8図 西楽寺本堂裏墓地出土壺

(鈴木 2017 より転載)



第9図 西楽寺本堂裏墓地の中世石塔

(松井・木村 2020 より転載)

第5節 近世(江戸時代)

本坊に葺かれたと考えられる「周知郡 □□(馬ヶ)谷村 瓦屋」銘の菊紋鬼瓦(個人蔵)が見られ、宇刈から瓦を供給していたことがわかる(写真4)。さらに、「□天保九戌年正月 □金谷瓦屋喜□良之作」銘の鬼瓦が残る(写真5)。また、本坊は安政大地震(1854年)に全壊した記録が残り、現在葺かれている瓦も江戸後期に比定でき、記録と対応する。さらに、松本



写真4 馬ヶ谷産鬼瓦(左)と銘(右)(個人蔵、筆者撮影)



写真5 喜口良作鬼瓦(左)と銘(右)(筆者撮影)



写真6 三州瓦屋窯跡付近の瓦(1)

写真7 三州瓦屋窯跡付近の瓦(2)



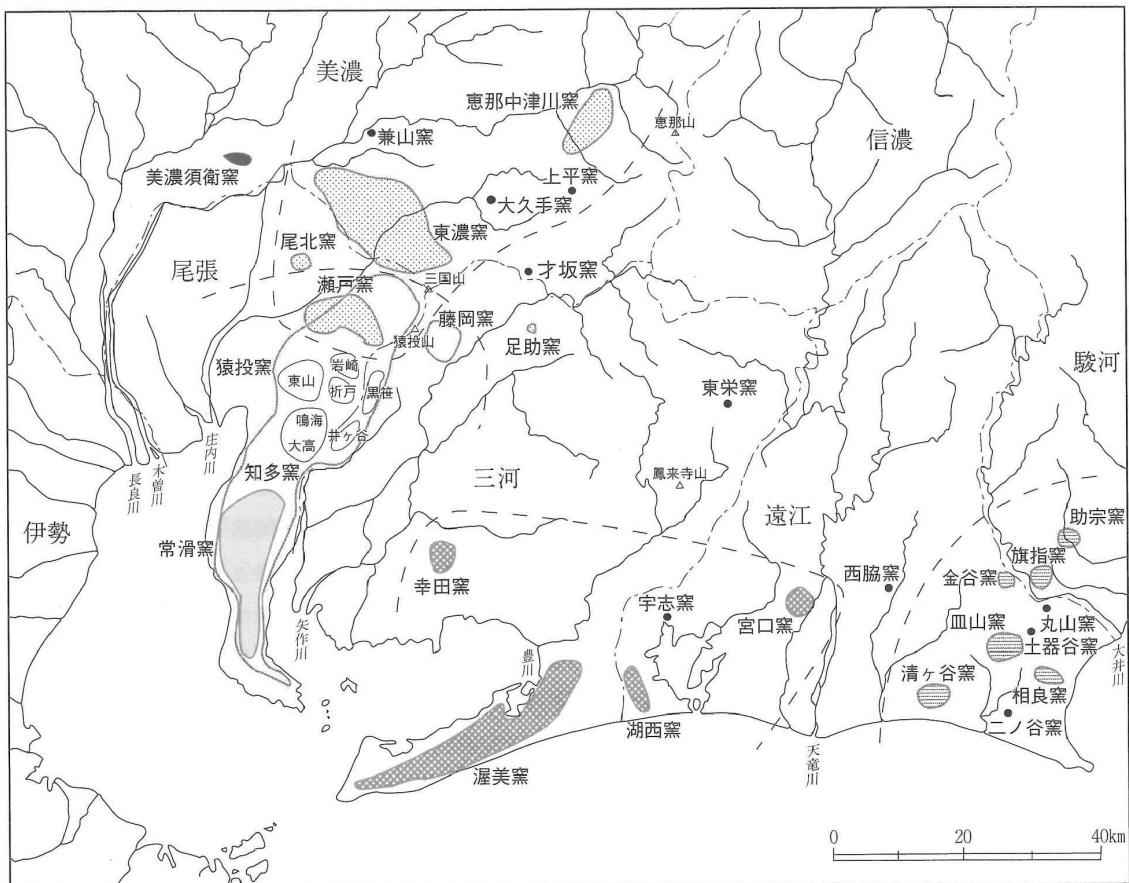
写真8 本坊に現在葺かれている瓦

坊上方の農家の古老曰く、その家は江戸時代後半に三河より婿を取ったことで「三州瓦屋」の屋号を持ち、瓦屋を近代まで営んだと言う。窯も住居南側に築かれたが、現在は畠となり痕跡はない。しかし、現在畠で見られる軒瓦は三巴の棟瓦等だが(写真6・7)、本坊で見られる軒瓦は菊紋の軒丸瓦と形骸化した滴水瓦、隅瓦と三巴文軒丸瓦である(写真8)。そのため、境内に隣接した瓦屋からではなく、付近の瓦屋から供給を受けたとみられ、西楽寺における瓦の供給には検討の余地を残す。ちなみに、先述の農家の母屋の横には井戸が残り、これは高平山へ続く道と接するため、毎朝僧侶が水を汲みに来たという。

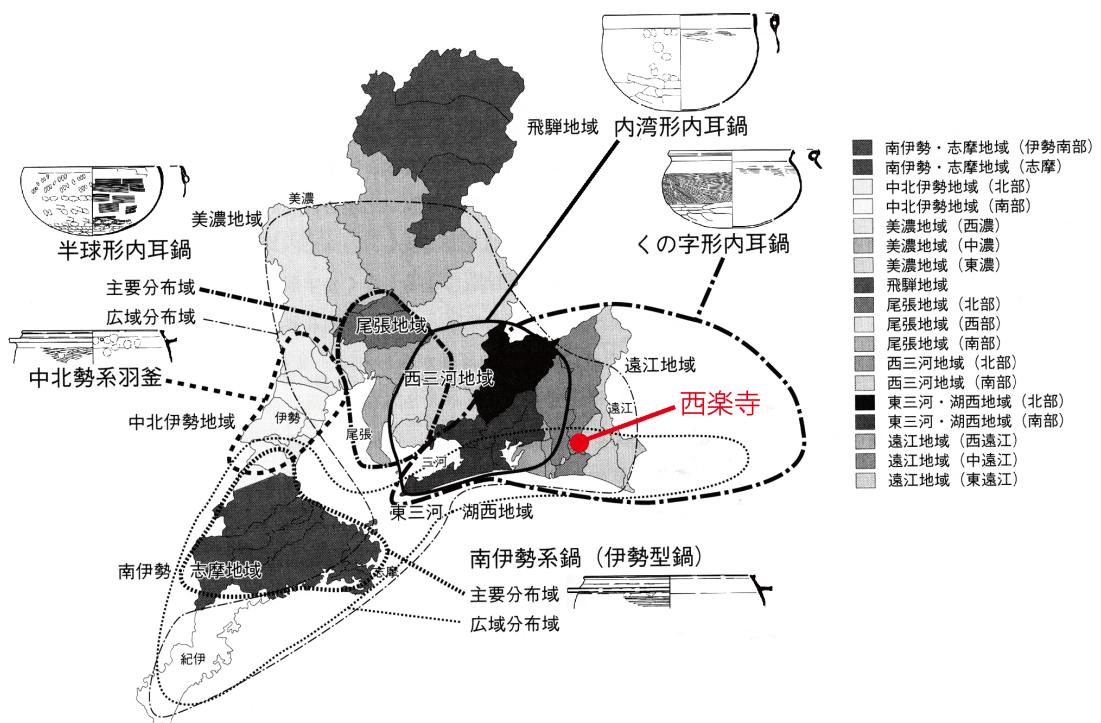
第6節 陶器流通から見る西楽寺の動向の背景

西楽寺は、平安後期の作である本尊阿弥陀三尊が中央で正規の仏像制作の技術を習得した正統派の仏師が想定されており(大宮 2021)、西国との関係が指摘できる。対して、江戸時代には住職が将軍綱吉・家宣・家継の葬列に参加し、歴代の住職は東北・関東出身者である。さらに、智積院や仁和寺といった京都の寺院とも関係を有していた。

これについて、東海地方を代表する中世陶器である山茶碗は伊勢から駿河西部まで直接的に流通し(藤澤 2008)、日常的に山茶碗類を使用する地域は駿河国の薩埵山・富士川以西と評価されている(鈴木 2022)。また、遠江における山茶碗類の使用は渥美・湖西型が主体で、遠江北部では東遠型が多い(第10図)。なお、猿投窯・常滑窯では鳥羽離宮や京都の寺院に葺き上げる瓦、渥美窯では東大寺再建瓦が焼かれ、その生産には国衙や院の関与が想定できる(寺井 2024)。また、磐田の一の谷中世墓群では古瀬戸や常滑製品、西楽寺でも渥美窯製品が多く見られ、西からの物品が多く入る。さらに、古瀬戸工人が15世紀になると一時的に瀬戸を離れ、最東端は大井川沿岸の志戸呂窯を営んだ(藤澤 2004)。中世後期には東海地方全域で土師器煮炊具として「内耳鍋」が用いられ、内湾形内耳鍋が西三河～天竜川にかけ分布するのに対し、くの字形内耳鍋は東三河～駿河にかけ分布する(第11図)。かわらけは各地域で手づくり成形・ロクロ成型が見られ、遠江は両者併存から15世紀後葉以降にロクロ主体となるが、西遠と中東遠で形状が異なる。16世紀後葉には、瀬戸美濃工人が浜名湖北岸の初山窯、後に大井川沿岸の志戸呂窯を営み、家康と深く関わったと考えられ、遠



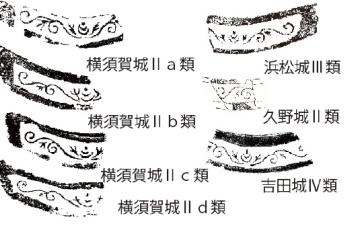
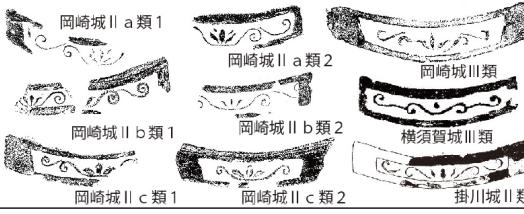
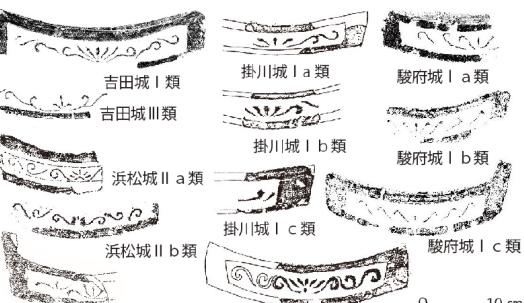
第10図 東海の中世諸窯(中野 2022 より転載)



第11図 16世紀前半の土師器煮炊具の分布と土器様相から見た地域区分

(鈴木 2022 より改変・一部加筆)

第1表 駿河・遠江・三河の織豊系城郭出土軒平瓦(寺井 2022 より転載)

共通文様瓦(播磨系)		
A群	B群	C群
 <p>浜松城 I 類 1 浜松城 I 類 2 浜松城 I 類 3</p> <p>岡崎城 I 類 横須賀城 IV 類 1 横須賀城 IV 類 2</p>	 <p>横須賀城 I 類 浜松城 IV 類</p> <p>駿府城 II 類</p>	 <p>横須賀城 II a 類 横須賀城 II b 類 横須賀城 II c 類 横須賀城 II d 類</p> <p>浜松城 III 類 久野城 II 類 吉田城 IV 類</p>
独自文様瓦		
播磨系		近畿系
 <p>岡崎城 II a 類 1 岡崎城 II a 類 2 岡崎城 II b 類 1 岡崎城 II b 類 2 岡崎城 II c 類 1 岡崎城 II c 類 2</p> <p>横須賀城 III 類 掛川城 II 類</p>		 <p>吉田城 I 類 吉田城 III 類 浜松城 II a 類 掛川城 I c 類 久野城 I 類</p> <p>掛川城 I a 類 駿府城 I a 類 掛川城 I b 類 駿府城 I b 類 掛川城 I c 類 駿府城 I c 類</p>
桐紋		
 <p>吉田城 II a 類 吉田城 II b 類 (縞尺不同)</p>		

江東部では瀬戸美濃製品の流通量が大幅に減少する(藤澤 2005)。なお、関東では瀬戸美濃製品が14世紀後半以降に一定量出土するが、少量であるが初山・志戸呂製品もみられる(秋元・池谷 2022)。さらに、久野城主の松下之綱が独自に工人を招来し生産した瓦には安土城と同系統の畿内系文様の軒平瓦が見られ、周辺城郭でも畿内系・播磨系の文様瓦が存在する(第1表)(寺井 2022)。また、遠江西部では遠隔地では見られない瀬戸美濃産の仏供や内耳鍋も見られるが、江戸時代後期には浜松周辺が農閑副業による近世瀬戸焼の下物販売圏の東限であった(藤澤 2005)。加えて、常滑焼は東北においては13世紀以降、関東では15世紀以降に出土量が減少し、近世には主に江戸のみで見られる(中野 2012)。さらに、近世瀬戸美濃窯製品は東北や関東へ庶民需要に応える形で多く出土している(檜崎ほか 2006)。

このような状況から、西楽寺が位置する中東遠は古代から中世にかけ天竜川以西と関係を持つ。15世紀後葉以降に天竜川が境となる様相を呈するが、尾張・美濃製品は関東・江戸における需要に応えていることから、断絶と言える状況とはならない。

第7節 予察

前節までより、西楽寺縁起と周辺遺跡の状況は一致していることから、西楽寺縁起の信憑性は考古学的に高いと考えられる。しかし、行基が開いたとされているが、行基の活動範囲は畿内とその周辺のみとされている。当地域の古代寺院は平戸廃寺のみ確認されており、地理的に崇信寺10号墳や院内3号墳、観音寺本堂横横穴群の被葬者が関係しよう。同じく豪族が埋葬された春岡古墳群周辺には西楽寺が位置する。そのため、西楽寺の開山には春岡古

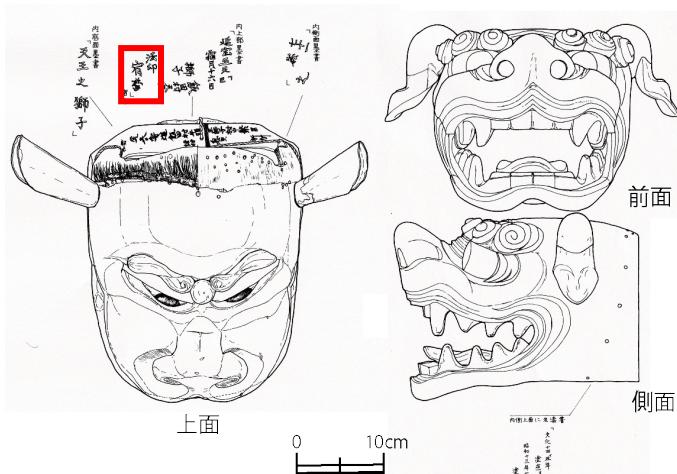
墳群の被葬者一族を想定できる可能性がある。これについて、袋井市も稻荷領家遺跡の郡司層等による造寺を想定している(袋教委 1993)。しかし、開山時期は考古学的成果から言及することは難しく、考古学的に信憑性が高いと考えられる縁起に従い、奈良時代であろう。

第2章 祇園祭

天竜川水系の天王社は尾張の津島系であるのに対し、太田川流域の天王社は京都の八坂社の分社である(武井 1996)。祇園祭は貞觀 2 年(869)に神泉苑で御靈会を行ったことに始まる官祭であることは知られているが、明応 5 年(1496)には幕府の要請により、祇園御靈会は官祭から町祭となり、町の負担で行われるようになる。祇園祭が元々は西楽寺で行われていた可能性を指摘されている(森町 1996 など)。しかし、中世後半以降の集落は現在の町の原型である可能性があり、埋蔵文化財包蔵地として認知されていない可能性がある。そこで、祇園祭と西楽寺の関係から、補完したい。

第1節 飯田

国指定重要無形民俗文化財「山名神社天王祭舞楽」で使用される獅子頭の墨書に、西楽寺住職の「宥香」の名が見られる(森町 1996)(第 12 図)。この資料は、飯田・上山梨を通して唯一の西楽寺と直接関係する資料である。また、明応 5 年(1496)に四天王寺から芸能が伝わるとされる。周辺では 13 世紀まで中世墓などが見られるが、14 世紀には観音堂中世墓のみと減少する。15 世紀になると飯田城・宇刈



第 12 図 天王祭舞楽「宥香」銘獅子頭(森町 1996 より転載)

北城・本庄山砦が築城され(水野 2022)、拠点的・戦略的な遺跡が出現する。同様に、西楽寺境内で見られる石塔も 15 世紀以降のものである。

第2節 上山梨

上山梨は貞享 2 年(1685)に大火が起り、上山梨村は全焼(袋歴文 2020)。これにより、祇園祭に関する資料も焼失したと考えられる。そこで、令和 6 年 7 月 12 日に山名神社宮司の幡鎌氏協力の下、西楽寺との関係を探るために御輿・四神・鉢・弓を調査した。御輿「鳳輦車」は鳳輦を模した型であり、享保 12 年(1727)に氏子が寄進した。『山梨祇園祭りと下町屋台の歴史』には、十両余りで名古屋から購入したとある。御輿の四方に三面ずつ、計 12 面ある錫製鏡背面の銘に「田中伊賀作」と見られる(写真 9・10)。これは現在の田中伊賀仏具店の可能性があり、仁和寺の御用仏具店である。これについて、弘化 2 年(1845)に榮岳が仁和寺において有栖川宮に灌頂を行っている。また、幕末には西楽寺住職が錫製品を京都に発注している^(註2)。このような状況から、西楽寺と仁和寺の関係から錫製鏡が田中伊賀へ発



写真9 鳳輦車(山名神社蔵)



写真10 鳳輦車付属錫製鏡背面(山名神社蔵)

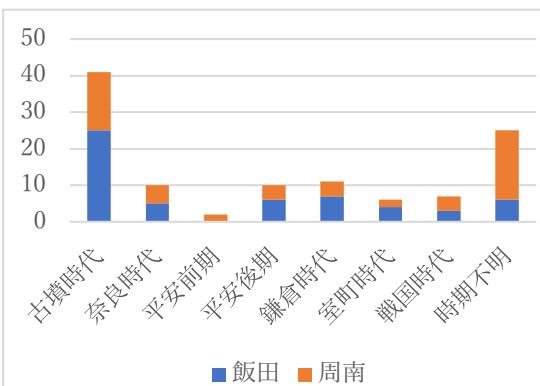
注された可能性がある。さらに、装飾には白・赤・黄色のガラス玉も使用されており、産地は限定的である^(註3)。このことから、西楽寺と上山梨山名神社も関係を指摘できる。

おわりに

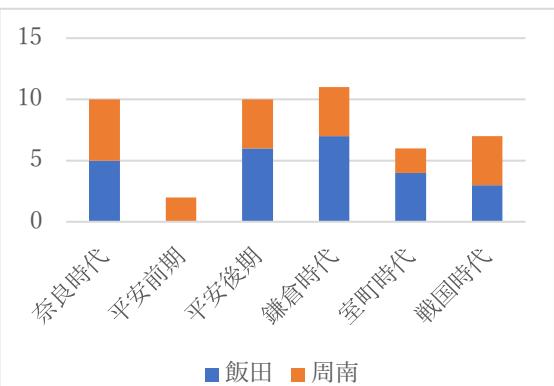
西楽寺周辺は弥生時代より遺跡が見られ、特に古墳時代の遺跡が多い。そのため、古代には地方の拠点的性格を有したと考えられ、西楽寺が奈良時代以前に開かれた可能性を指摘できる。さらに、郡衙遺跡である稻荷領家遺跡・春岡遺跡を除く遺跡では平安時代前期の遺物が見られず、当地域の一時的な衰退期と考えられる。平安後期に源顯房が再興する頃には、灰釉陶器・山茶碗といった遺物が周辺で多く出土するため、西楽寺を含む周辺は同時期に衰勢した可能性がある(第2・3表)。平安末期から鎌倉時代には西楽寺などから中世陶器が確認され、中世石塔も西楽寺を含む周辺寺院で確認されている。

また、西楽寺と飯田・上山梨の祇園祭は関係を指摘できる。14世紀には周辺遺跡が減少するが、天王祭舞楽が舞いだされたとされる15世紀には城郭が出現し、領主が領民を動員できる力があることが窺える。同様に、西楽寺境内で見られる石塔は15世紀以降のものである。西楽寺縁起には13世紀から15世紀の動向が見られないが、これも周辺遺跡や祇園祭の動向から、推測することが可能と考えられる。

現在知られる西楽寺文書の多くは中世末期(戦国時代)以降のものであり、縁起をはじめ近



第2表 時代別西楽寺周辺遺跡数⁽⁴⁾



第3表 時代別西楽寺周辺遺跡数(抜粋)

世文書が主体です。西楽寺創建1300年に際し、中世以前の西楽寺の姿に迫る一手段として、今回は考古学と祇園祭を用いました。今回の整理が、西楽寺研究の一助となれば幸いです。

《註釈》

註1：中世の石塔は本坊、三重塔址、本堂西側の地蔵群、本堂裏の墓地、無縁墓で見られ、墓地と無縁墓について詳細な報告がされている（松井・木村2020）。西楽寺境内で見られる石塔はほとんどが砂岩を用い、宝篋印塔・組合式五輪塔・一石五輪塔が見られる。全298点中、16世紀中～後葉の一石五輪塔が166点と55%を占め、その他は15世紀前葉～16世紀に位置付けられる組合式の五輪塔や宝篋印塔の部材である。

註2：杉山侑暉氏の御教示による。

註3：延宝4年（1676）には長崎でガラス製造が行われ、正徳年間（1711～1715）に江戸、宝暦元年（1751）に大坂でガラスが製造されている（東部硝子工業会HPより）。錫製鏡と同時期のものであれば、西楽寺住職は將軍綱吉・家宣・家継の葬列に参加していることから、江戸でガラスを求めた可能性がある。

註4：古墳や横穴は飯田・周南地区で200基以上存在するため、ここでは一基ではなく群の数を合計している。また、古墳や横穴は8世紀代まで築造・追葬が行われることは知られるが、発掘調査から成果を得られなければ年代は不明なため、古墳・横穴は一括して古墳時代に数えた。しかし、調査で別時期の遺物が見られた場合は、その時代の数値に反映した。

《引用・参考文献》

湯之上 隆 1983『第三編古代・中世の袋井』『袋井市史 通史編』袋井市史編纂委員会

袋井市教育委員会 1985『宇刈の横穴－宇刈横穴N群 82～85号穴発掘調査の概要－』

袋井市教育委員会 1991『袋井市三沢古墳群』

袋井市教育委員会 1992『袋井市春岡遺跡』

白澤 崇 1993『川田、藤藏淵遺跡の条里制遺構』『条里制研究』第9号 条里制研究会

袋井市教育委員会 1993『平成4年度補助金関係発掘調査報告書－西楽寺・長者平遺跡・不入斗I遺跡－』

袋井市教育委員会 1994『川田、藤藏淵遺跡II』

伊藤美鈴 1996『第2編原始時代の森 第3章古墳時代の森』『森町史 通史編 上巻』森町史編さん委員会

（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996『川田・藤藏淵遺跡』

武井正弘 1996『「山名神社天王祭の芸能」拾遺』『森町史 資料編5 舞楽・民俗芸能・民俗資料』森町史編さん委員会

森町教育委員会 1996『静岡県森町 飯田の遺跡』

森町史編さん委員会 1996『森町史 資料編5 舞楽・民俗芸能・民俗資料』

足立順司 1998『古代末期の地方経塚-森町における二例-』『森町史 資料編一 考古』森町史編さん委員会

森町史編さん委員会 1998『森町史 資料編一 考古』

袋井市教育委員会 1998『袋井市春岡地区区画整理事業に伴う春岡遺跡群発掘調査概要報告書 一見えてきた昔の春岡－はるおか遺跡群』

松井一明 2003『稲荷領家遺跡群（稲荷領家遺跡・春岡遺跡）』『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』静岡県教育委員会

（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2004『森町睦実の遺跡』

袋井市教育委員会 2004『鶴田II遺跡』

- 藤澤良祐 2004 「付編2「古瀬戸系施釉陶器窯」の成立過程」『下石西山窯跡発掘調査報告書』土岐市教育委員会
- 藤澤良祐 2005 「伊豆・駿河・遠江出土の瀬戸美濃製品」『中世の伊豆・駿河・遠江ー出土遺物が語る社会』高志書院
- 松井一明・太田好治・木村弘之 2005 「遠江西・中部地域の石塔の出現と展開ー静岡県下における中世石塔の研究1ー」『静岡県博物館協会 研究紀要』第28号
- 静岡県博物館協会
- 檜崎彰一ほか 2006 『江戸時代のやきもの生産と流通ー』(財)瀬戸市文化振興財団
- 袋井市教育委員会 2007 『遺跡でたどる袋井のあゆみ 第3彈奈良・平安時代の巻』
- 藤澤良祐 2008 『中世瀬戸窯の研究』高志書院
- 袋井市教育委員会 2010 『鶴田I遺跡』
- 中野晴久 2012 「第3章消費遺跡解説 第2節常滑製品」『愛知県史 別編 中世・近世常滑系』愛知県史編さん委員会
- 豊島直博 2017 「双龍環頭太刀の生産と国家形成」『考古学雑誌』第99巻 日本考古學會
- 鈴木敏則 2017 「浜松市内で発見された中世の蔵骨器(後編)」『浜松市博物館報』第29号 浜松市博物館
- 静岡県教育委員会 2019 『静岡県の中近世墓 基礎資料編』
- 豊島直博 2019 「頭椎太刀の生産と流通」『考古学雑誌』第102巻 日本考古學會
- 袋井市歴史文化館 2020 『災害と西楽寺の建造物 江戸時代編』
- 松井一明・木村弘之 2020 「第2章第2節 遠江の中世石塔群」『静岡県の中近世墓 詳細報告編』静岡県教育委員会
- 大宮康男 2021 「西楽寺の本尊」『みほとけのキセキー遠州・三河の寺宝展』(展覧会図録)みほとけ展実行員会
- 島口直弥 2021 「みほとけのキセキー遠州・三河の仏像とその魅力」『みほとけのキセキー遠州・三河の寺宝展』(展覧会図録) みほとけ展実行員会
- 松井一明 2021 「第2章 静岡県の中近世墓の調査成果」『静岡県の中近世墓 総括・地域報告編』静岡県スポーツ・文化観光部文化局文化財課
- 秋元太郎・池谷初恵 2022 「第3章 関東」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 鈴木正貴 2022 「第6章 東海」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 寺井崇浩 2022 「閔白様御家中衆の造瓦体制」『愛城研報告』第25号 愛知中世城郭研究会
- 中野晴久 2022 「第5章 中世陶器」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 水野 茂 2022 「224 飯田城」「229 本庄山砦」「230 宇刈北城」『静岡県の城跡 中世城郭縄張図集成(西部・遠江国版)』静岡古城研究会
- 鈴木康大・平野吾郎 2023 「遠江国の官衙・寺院と窯業」『東海の古代官衙・寺院と窯業生産』地球と考古学の会
- 寺井崇浩 2024 「中世窯業東山地区・鳴海支群の生産I—瓦を中心として—」『文研会紀要』第35号 愛知学院大学大学院文学研究科文研会